

優しさの用量

若林 美優

今朝、姉が息を引き取った。突然のことだった。

僕が慌てて村長の家に駆け込んだ後は、とても迅速にことが運んだ。広くはないけれど姉と自分の二人には十分過ぎた家が人で溢れかえっているのを見ると、変な気分が起ころ。祭でもやるのかと思いたくなるけれど、その人達の顔が誰一人として楽しそうなものがないのを見れば、そうではないことを自覚する他になかった。

きっと、最期に会話をしたのは僕だったと思う。昨晚、台所で食器の片付けをする姉に僕が声をかけた。

「何かあったの？」

「ごめんなさい、上手く拭えなくて。」

流し台で同じ食器をずっと拭いていた姉は、こちらを振り向くことなく答える。

「何かあったら言ってね。大したことは言えないけどさ、力になるよ。」

「ありがとう。あなたは優しい子ね。」

その後、そのまま部屋に戻るのがはばかられてうろろしていた僕を見て、姉は少し言葉に迷うと「実は、些細なことなのだけれどね。」と切り出した。

姉は精神的に強い方ではない。よく気がつく人だけれど、だからこそ戸惑ってしまう質なのだ。僕はそんな姉が心配だった。

「聞いてくれてありがとう。」

「ううん、姉さんは考えすぎだよ。また何かあったら言ってね。」

「ええ。」

小一時間ほどだっただろうか。姉の話聞き、その度に励ますことを繰り返した。昔から時々行われるこの会話に、少しずつ、僕の励ます腕も上がったように思える。

「それじゃあ、僕は部屋に戻るよ。」

「おやすみなさい。」

「うん、おやすみなさい。」

それが最期の会話だった。今思い返してみても、何の変哲もない夜だった。

「やあ、大丈夫か？」

ぼんやりと集まった村の人達を眺めていた僕に声をかけた男がいた。

「僕は大丈夫だよ。姉さんは診終わって？」

「ああ、もう運んでもらって大丈夫だ。」

そう言っただけは男衆に片手を挙げて合図を送ると、男衆もまた合図を送り返した。

「それで、姉さんがどうして死んでしまったのか分かった？」

「悪いがハッキリとは分からん。病気の形跡は見受けられなかったし、目立った外傷もない。気になることが無いわけではないが、医者として不確かなことを話すのは気が引ける。」

昨日まで何ともなかったんだろう？」

「少なくとも僕には何ともなかったように見えたよ。医者としてじゃなくて、ペントネル個人の意見も聞きたい。」

ペントネルはこの村でただ一人の医者だ。僕も姉も小さい頃からの付き合いだったから、彼なら何か分かるのではないだろうかと相談に乗ってもらうことになった。しかし、そんなペントネルも申し訳なきような顔をするばかりだ。

「すまない、それでも答えられない。分からないんだ。この村じや、普段診るのは老人のぎつくり腰か子供の擦り傷くらいなものだから。」

想像通りだったけれど、期待はずれでもあったその回答に「そっか。」とだけ返せば、ペントネルはもう一度「すまない。」と謝った。

「謝らないで。ペントネルは悪くないよ。」

「すまない——いや、そうだな。ありがとう。」

午前中は人で溢れかえっていた我が家も、夕方には閑散とし始めていた。棺に納められた姉が家から運び出されるのを見ると、いよいよ自分が一人ぼっちになってしまったという実感が募る。元から持て余していたこの空間が、これから先さらに広がるのかと考えると、なんだか虚しくなる。

「これからお前は どうするんだ、このままこの家に住むのか？」

この日、姉の検死を終えてからずつと僕の傍にいてくれた。ペントネルが僕に聞いた。一人になってしまった僕のことを心配してくれているのだろう。ペントネルの質問に少し間を置いてから、僕は考えていることをそっくりそのまま言うことにした。

「ううん、ここは引き払ってしまおうと思う。父さんが残してくれた家だけど、僕一人には広すぎるよ。」

「それじゃあ、何処に行くのかアテはあるのか？」

「いや、この村を出ようと思う。」

僕の答えにペントネルは沈黙した。その沈黙が驚きからきたものなのか、答えに呆れたか、黙ったのか僕には分からなかった。ペントネルが答えないのを見て、僕は続ける。

「今朝から悩んでいたけど、ペントネルの言葉で決めたよ。僕は旅に出る。」

まさか自分の言葉が決め手になったとは思ってもみなかったのだろう。ペントネルは自分の発言を辿るように宙を仰いだ。

「僕だけじゃなくて、ペントネルにも分からなかったんだ。この村にいたらきつと、何故姉さんが死んでしまったのか永遠に分からない。」

僕は、何故姉さんが死んでしまったのかを知りたい。そう付け加えれば、ペントネルの顔はやつとこちらを向いた。

「そうか。なら止めはしない。村長達には俺から話を通しておくよ。」

「ありがとう。」

十日後に村を発つつもりだと話せば、ペントネルはもう一度「そうか。」と呟いた。

村の西隅にあるりんご畑を夕日が赤く染め始めたのが窓から見えたので、夕飯の支度に取り掛かることにした。料理は普段姉がやってくれていたもので、あまり得意ではない。ペントネルに手伝って貰いながら作ったあまり上出来ではない料理の山を振る舞うべく、上階の姉の部屋で荷物の整理をしてくれた人達を居間に呼ぶ。姉以外の人と食卓を囲むのは随分と久しぶりだ。階段の下から食事の準備が整ったことを大声で告げれば、やっぱり大きな声が返ってくる。少しして来客用に引っぱり出してきた机もすっかりうまってしまふと、宴会が始まった。人が多いせいも、酒瓶の差し入れがあつたせいも、食事の席は思つていたよりもずっと賑やかだった。姉に関する思い出話に始まり、僕の話が盛り上がってきた頃に食卓を囲んでいた一人がそう言えば、と僕の方を向いた。「机を片付けていたら出てきたの。君に渡した方がいと思つて。」と渡された日記は間違ひなく姉の物だった。礼を言つて受け取ると、その人はすぐに何事もなかつたかのように会話に戻つていった。いつの間にか話は僕と姉の幼少期にまで遡つていたらしい。なんだかこそばゆい気もしたが、時間はあつという間に過ぎていった。

程なくしてお開きとなり、自分に力を貸してくれた人達に礼を言いつつ玄関へ見送る。挨拶を交わして皆が家を出て行つてしまえば、家の中は驚くほど静かになった。僕も早く寝てしまおうとシャワーを浴びて自室の布団に身を包む。いつそ耳鳴りが聴こえてきそうな程の静寂に寂しさを覚えれば、ふと先程受け取つた日記が目止まった。いくら姉のものとはいえ、人の日記を勝手に見ていいものかとも思つたが、何か分かるかもしれないと思ひ直しページを捲る。そこに見えたのは、気弱ながらも素朴で優しい姉の姿と、そんな姉の僕に対する感謝と謝罪の想いだった。姉は、自分の死を予期していたように思えた。

どうして姉は自分の最期を感じたのかという疑問も、姉が僕の想像以上に僕を気にかけてくれていたことに対する感謝も、何より、結局何も気がついてあげられなかつた後悔と謝罪も。もう伝える相手はここにはいないという事実をやつと肌を感じられた。心が締め付けられるような、痛いような。そんな気持ちになつたけれど、僕は泣かなかつた。ごめんね、姉さん。僕は姉さんが思うよりずっと、薄情な弟みたいだ。

それから十日して、出発の日の朝になった。産まれてからずっとお世話になつたこの村に別れを告げる時が来たのだ。早くに両親を亡くした僕と姉にとって、この村の大人は本当の親のような存在であり、友達のような存在でもある。とにかく沢山お世話になつた。これまでのお礼と出発の挨拶を兼ねて、僕は村長の家に足を向けた。

村長の家に着けば、村長に加えて他の数人の大人も出迎えてくれた。その中にペントネルの姿も見える。

「おはようございます。挨拶に来ました。」

「おはよう、よく来たね。あの小さかつた君が旅に出るほど大きくなつたなんて、感慨深
いよ。」

「ここまで成長出来たのも皆さんのお陰ですよ。」

そう言って頭を下げれば、村長は「寂しくなるね。」と言いながら目を細めた。

「お土産を持って帰ってきますよ。」

「ああ、待っているとも。餞別と言えるほど大層なものじゃないが、これを持っていきな
きゃ。」

そう言って汽車の切符を渡される。「ありがとうございます。」とお礼を言うと同時に、渡された切符に違和感を覚える。

「あの、なんで二枚？」

僕の手の中には切符が二枚。せつかくの贈り物だけれど、僕は一枚しか切符を使うことができない。その事はみんなも知っているはずなのに、誰も僕と同じ不思議そうな顔すらしていない。

「それなんだが、」

頭に疑問符をいくつも浮かべる僕に答えたのは村長ではなく、意外なことにペントネルだった。

「俺も行くことになった。」

「どこに？」

「お前の旅に。俺も一緒に行く。」

僕の疑問符は減るどころか、むしろ増えるばかりだ。驚いたような、不思議そうな顔をしたままペントネルを見つめれば、ペントネルは苦笑した。

「悪いな。村長がどうしても心配だと言って言うから。」

僕はそんなに子供に見えるのだろうか。ペントネルにそう言われて村長の方を見れば、村長は否定も肯定もしないままペントネルを見つめていた。

「どうしても嫌なら今断っていいんだぞ。まだ間に合う。」

「ううん、嫌じゃない。そうじゃないんだよ。ただ驚いただけなんだ。むしろ嬉しいよ。

よろしくね、ペントネル。」

僕自身、中央都市へ買い物に行くところはあっても、長く村外で過ごすのは初めてだ。不安がないわけではない。これから先の旅路をペントネルが支えてくれるのであれば、これ程心強いことはない。

「それじゃあ、行こう。汽車の時間が来てしまうよ。」

「ああ、そうだな。村長、行ってくるよ。」

「行ってきます。」

「頑張ってください。」

村長達に送り出されて、村のはずれの駅まで少しだけ早足で向う。駅舎にたどり着けば駅長のハネスさんが顔を覗かせた。

「よう、よく来たな。話は聞いてるぜ。」

「こんにちは、ハネスさん。」

「中央都市行の汽車はもう来るぞ。そら、向こうの方に煙が見え始めた。」

そう言ってハネスさんは顎で溪谷がある方角を指す。つられるように僕もペントネルもそちらに顔を向ければ、その言葉の通りにもうもうと立ち上る黒い煙が見えた。

少しして駅に滑り込んできた汽車は、僕達を迎え入れるように口を開いた。

「頑張れよ、坊主共。」

「うん。行ってきます。」

「達者でな。ペントネルも、しっかり見ててやれよ。」

「もちろんだ。」

ハネスさんとも挨拶を交わし、僕とペントネルは揃って汽車へ足を踏み入れる。月並みだけれど、これは僕の旅にとって最初の一步になるのかもしれない。そう思うと、この一步がとても大切なものに思えて、少しだけ緊張してしまう。僕達が乗り込めば汽車はその口を閉じて走り出す。当然、振り向いてもその場からは外は見えないけれど、僕はまだそこに僕達の暮らしていた村が感じられるように立ち止まって振り返ってしまう。そんなことをしていれば、「窓から見ればいいのに。」とペントネルに笑われてしまった。

僕達が乗り込んだ汽車は、そんな僕達には構うことなく中央都市へと進む。汽車が走り出せば、しばらくは出来ることが少なくなってしまう。僕とペントネルは空いた時間を利用して自分の間の計画を建てることにした。

「まずは宿の確保が先決だね。少ししたらお金を稼ぐ手段も見つけなくちゃ。ひとまず明日になったら中央図書館か病院に向かおうと思うんだ。どうかな。」

「ああ、問題ないと思う。病院なら俺の知り合いもいるし、まだケテルネもいるはずだ。」

「なら病院に行こう。ケテルネにも会って、姉さんのことを聞いてみるよ。」

ケテルネは僕達と同じ村の出身者で、数年前に医者を目指して中央都市へ勉強のために発った人物だ。村で唯一の医者であるペントネルが僕の旅に同行できているのも、ケテルネが晴れて一人前の医者になり、来週末に帰ってくるようになっていくからだという話だった。ケテルネ曰く、もの、人、情報、さらにはもつと色んなものが他のどこよりも多く集まる中央都市は、僕達のいた村では知ることのできないことも、たくさん知ることができるらしい。僕よりもずっと博識なペントネルがその昔長く中央都市に出ていたのを見ると、きつとそれは正しいのだろう。

汽車の中で地図を広げ、どこに宿を取るのかを決めた後は軽い昼食を取り、途中で乗り合わせた母子と談笑したり、老紳士に知らなかったトランプゲームを教えてもらうなどをして過ごした。そういうしている間に、辺りは夕暮れに包まれた。窓から西日を眺めていると、ふと我が家にもあった西向きの窓から見えるりんご畑を思い出して寂しくなった。辺りの景色は村とは似ても似つかず、高い建物や道を行き交う人と車、見たこともない機械が埋め尽くしている。しかし、そんな気分も中央都市へ到着したアナウンスが耳に入ると吹き飛んだ。

荷物をまとめて汽車を降りる。駅から外へ出ると、目が回るほどの喧騒が僕達を歓迎した。何度か来たことはあったけれど、やはりこの騒がしさには圧倒されてしまう。夕日があちこ

ちに貼られた硝子に反射して眩しい。この陽が落ちきる前に宿を探すことがまずは第一の目標だ。辺りをしきりに見回して、ともすると迷子になってしまいそうになる僕をペントネルは笑いながらも待ってくれた。

病院に近い場所から食事をとりつつ宿を探す。数件訪ねてようやく見つけた部屋に荷物を運び込めば、もう陽はとっぷりと暮れていた。

「やっぱりここは人が多いね。」

「ああ。でもその分情報も手に入る。もしかしたら、案外早く目的を達成できるかもしれないな。」

「それは嬉しいな。ああでも、目的を果たしたらこの旅は終わってしまうの？」

「それを決めるのはお前だろう。俺はお前に着いていくさ。ほら、明日は朝から病院に行くんだ。早く寝ないと起きられないぞ。」

そう言ってペントネルはサイドテーブルのランプを残して、部屋の電気を消してしまった。「ペントネルは寝ないの？」そう聞こうとしたけれど、ペントネルがもう僕の方を見ていないことに気づいてやめた。ペントネルの言うように明日も早い。代わりに「おやすみなさい。」とだけ言って目を閉じる。目を瞑って明日のことを思い描こうとしたが、慣れない汽車旅の疲れからかいつの間にか寝てしまっていた。

翌朝、僕は車のエンジン音で目を覚ました。いつもの小鳥の歌声に比べてけたたましい目覚ましとなったそれに驚いて身体を起こせば、部屋にペントネルの姿が見えなかった。どこに行ったのだらうと急いで身支度を済ませてフロントに出てみれば、丁度電話を終えたペントネルがこちらに気がついた。

「お、起きたか。おはよう。」

「おはよう。誰に電話してたの？」

「病院にだよ。アポイントメントだ。こっちではするのがマナーだからな。」

宿の従業員に礼を言って電話を下げてもらった。ペントネルと並んで、そのまま朝食をとるために食堂へと向う。

「電話してくれてありがとう。ケテルネには会えそうかな。」

「その辺も伝えておいた。いることは確認ができたし、会えると思って大丈夫だろう。」

「そっか。姉さんのこと、まずはケテルネにも報告しなくちゃね。」

そのまま簡単な朝食をとり、すぐに病院に向けて出発する。姉が亡くなってからきちんと報告という形でそれを誰かに伝えるのは初めてだ。変に緊張していると、それがペントネルにも伝わってしまったのか。ペントネルは何も聞かずに「大丈夫だ。」とだけ呟いた。

病院に着いて受け付けに座る女性に。ペントネルが名前を告げれば、女性は「少々お待ちください。」と言って受話器を取った。言われた通りにしばらく待っているとよく知った声が聞こえてきた。

「やあ、お待たせしました。お久しぶりですね。」

振り向けば、そこにはケテルネがいた。

「久しぶりだね、ケテルネ。」

「今朝方かかってきた電話については言伝を確認しています。私に聞きたいことがあるんだとか。」

「うん、そうなんだ。実はね——」

僕は、十一日前に起こったことをかいつまんでケテルネに話した。姉の死因について、なんでもいいから思い当たることはないか、ということとは特に念入りに伝えた。

「ペントネルも何も気が付かなかったんですか？」

急に話を振られたからか、ペントネルは一瞬固まった。が、すぐにいつもの調子に戻る。

「ああ。原因が分かるほどのものはなかった。」

「そうですか。」

ケテルネはそんなペントネルに訝しげな視線を向けたが、それ以上は何も聞かずに僕に視線を戻した。

「すみません。この後私は昼休憩まで手が空きません。業務の合間になってしまいますが、心当たりは調べてみます。午後は休みをもらったので、ランチを一緒にさせてください。詳しい話はその時に。」

「ありがとう、ケテルネ。忙しいのにごめんね。」

「いえ、あなたの頼みですから。」

ケテルネは僕に笑顔で一時の別れを告げると、そのまま来た方向に帰って行った。途中、一度振り向いてペントネルに「あなたは他の方にも挨拶に行ってくださいね。」とだけ言い放ったけれど、やっぱり言い終わるや否やすぐさま踵を返して姿を消してしまった。

「忙しそうだったね、ケテルネ。」

「まあな。それで、俺も挨拶に行かなきゃならなくなった。」

ペントネルは申し訳なさそうに僕の方を見る。きっと僕を一人にすることに罪悪感を感じているんだろう。

「僕は大丈夫。待合室で待ってるよ。」

「すまない。すぐに戻るから。」

そう言っただけペントネルもケテルネが向かった方向に消えてしまえば、僕は一人になった。特にやることもなく待合室で待っていると、壁にかけられたポスターに目が止まった。ポスターには大きく『今月の健康目標、禁煙禁酒!』というタイトルが書かれており、タイトルの下には『中毒症状にご注意を』という文字が踊っている。時間を持て余していた僕は、何気なくそのポスターを読み始めた。内容としてはあまり珍しいものではなく、煙草やアルコールの過剰摂取による健康被害を訴えたものだ。僕の村の名産品だったりんご酒を思い出しつつ、やはり都会は酒場も多いのだろうかなんてことを考えていたらペントネルが戻ってきた。

「お待たせ。何を読んでいるんだ？」

「これだよ。暇だったから見てたんだ。」

そう言って先程まで眺めていたポスターを指させば、ペントネルもポスターに目を向ける。しかし、ペントネルもまた内容にはそこまで興味は持たなかったのか、「中毒症状、ね。」とだけ呟いて後はポスターには目を向けなかった。

ケテルネとのお昼ご飯までまだ時間があるので、僕達は図書館へ移動することになった。医学書が置いてある書架へ行き、気になる本を端から見っていく。普段医学書なんて読まない僕にはさっぱりだけれど、ペントネルは随分と手際よく何か載っているような本を引き抜いていく。途中で僕はペントネルが引き抜いた本に目を通す係に役職を変えたが、それでもこの大きな図書館から必要な情報を掴み取るには膨大な時間を必要としそうだった。そろそろ疲れてきたことに合わせて約束の時間も近づいていたので、出していた本をとりあえず借りて一度宿に運び、再び病院に足を向ける。病院では既にケテルネが僕達を待っていた。

「ケテルネ、お仕事お疲れ様。」

「お二人もお疲れのようですね。少しここで休まれますか？」

「ううん、大丈夫。僕もうお腹、ぺこぺこ。」

「ふふ、それじゃあランチに向かいましょう。美味しいパスタ屋を紹介しますよ。」

そう言ってケテルネが連れてきてくれたパスタ屋さんのパスタは本当に美味しかった。食事中は村のことやこの街のこと、それぞれの近況報告などの世間話で盛り上がった。久しぶりに会ったけれど、ケテルネは昔の、僕が知っているケテルネのままだ。そのことにどこか僕は安心感を覚える。食後のコーヒーに全員が手をつけると、ペントネルは本題を切り出した。

「それで、何か分かったことはあったか？」

「いえ、それが残念なことに。ですが、他の先生方の協力は得ることができそうなので、もう少し時間があれば望みもあるでしょう。」

「そっか。うん、そう簡単にはいかないよね。お仕事の間にも頑張ってくれてありがとう。」

「いえ、ご希望に添えず申し訳ないです。でも、そうですね。」

そこでケテルネは言葉を切り、僕の方を見てにっこりと笑う。

「午後は私がこの街の案内をしましょう。あまり根を詰めてはいけませんよ。まだ旅は始まったばかりなのでしょ？」

ケテルネのおかげで僕もこの街に随分と慣れることができたし、たくさんの人とも知り合えた。さらにペントネルの知識も上乘せされてかなりの情報が集まったと思う。訪ねた日から十数日、あの日から僕とペントネルは図書館と日雇いのアルバイトと往復し、ケテルネは仕事の合間を縫ってたくさんの人に協力を取り付けてくれた。村に帰るその日まで僕達に協力してくれたケテルネには感謝してもきれない。そうケテルネに伝えれば、ケテルネは「このくらい、お易い御用ですよ。」と笑うばかりだった。

中央都市での成果として、結果だけ言えば姉の死については分からなかった。けれど、気

になったことは二つほど出てきた。一つは図書館でみつけた本の中に出てきた『優しさ欠乏症』という言葉だ。栄養失調や脱水症状のように、人は何かが不足すればそれで死に至ることもある。僕は姉が優しさ欠乏症なのではないかと考えた。元々精神的に強くない姉は、とりわけ最近悲しそうな表情をすることが多かったように見えた。もし、姉が優しさ欠乏症でこの世を去ったというのなら、その責任は僕にもあるのではないか。そう。ペントネルに伝えたら、ペントネルは「あの村でお前の姉が優しさ欠乏症になることだけは有り得ない。」と僕の言葉を強く否定した。もう一つは。ペントネルの先生にあたる人だ。名前をロンというその人は、昔。ペントネルが中央都市で勉強をしていた時にお世話になった人らしい。その人なら何か分かるかもしれないとケテルネが取次ぎをしてくれて、次の目的地はロン先生の住んでいる農村になった。

中央都市を発つ日がやってきた。ここ最近毎日のように顔を合わせていたケテルネとはここでお別れになる。お互い反対側の汽車に乗るため駅で別れの挨拶をする。

「手伝ってくれて、本当にありがとうケテルネ。すごく助かったよ。」

「お役に立てたなら嬉しいです。最後まで付き合えないのは残念ですが、応援しています。頑張ってくださいね。」

「村の連中にもよろしく言っておいてくれ。」

「分かりました。ペントネルも、しっかりやってくださいね。」

最後にケテルネは。ペントネルを見つめてそう言ったけれど、僕にはケテルネの表情を見ても何を考えているのか分からなかった。

ケテルネの乗る汽車の発車ベルが駅に鳴り響き、ケテルネは「それじゃあ。」と僕に微笑みかけて電車に乗り込んだ。間もなくして僕達の乗る汽車の発車ベルも鳴ったので、姿の見えなくなったケテルネにもう一度別れの挨拶を告げて僕達も汽車に乗り込んだ。中央都市へ来た時と同様に。ペントネルと並んで席に着けば、汽車は駅を出て目的地を目指して進み出す。

「少し、聞いてもいいか。」

これからの長い汽車の時間をどう過ごすか考えていると、ペントネルが僕にそう聞いた。

「うん。何かあった？」

「もし、もしもの話だが」

ペントネルはそこで言葉を切ると、何かを決意するように、大きく息を吸い込んだ。

「俺が、もう答えが出ていると言ったらどうする？」

「それは、姉さんのことですか？」

「ああ、そうだ。」

僕は少し考えた。ペントネルはどうして急にそんなことを言うのだろうか。

「僕は、それならすごいなって思うよ。流石。ペントネルだなんて。」

「でもお前には話せないと言ったら。」

「話さないじゃなくて、話せないなら待つよ。話せるようになるまで。」

「それじゃあ、もし俺がこの旅に着いてきたのが——」

ペントネルが何かを言いかけたところで、ぽおーと声高に汽笛が鳴いた。一瞬の沈黙が僕達を包む。

「いや、やっぱりなんでもない。」

結局、ペントネルは続きを言っただけで話が終わった。

「ペントネルはもう全部分かったの？」

それでも、先程からの質問が僕の中にひとつの疑問を作り上げる。ペントネルはどうして姉が死んだのか、もう分かっているのではないか。

「今のはもしもの話だ。気にしないでくれ。」

それきりペントネルは口を閉ざしてしまった。なんとも車内の空気が重苦しく感じられる。僕の方を見ることもなく窓の外へ目をやる。ペントネルに話しかけても、短い相槌しか返ってこない。ならば、と僕は好き勝手に喋ることにした。

「もしもペントネルが姉さんのことで僕に何か隠していても、それがペントネルの出した答えなら僕はそれでいいと思う。だってペントネルは優しいから、きっと僕のためを思っただけでしてくれているのだし。それに、ペントネルは中央都市でも十分手伝ってくれたじゃないか。あとは僕のやるべき事だよ。」

そうペントネルに言えば一瞬こちらを見た気がしたが、すぐにまた窓の外へ視線を戻して「そうか。」と呟いただけだった。僕にはペントネルが何か考え事をしているように見えたので、それ以上は邪魔にならないように口を閉じた。あと半刻ほどすれば目的地に到着する。それまで僕は眠ることにした。

目的地に到着したことを知らせるアナウンスで目が覚めた。

「お、目が覚めたか。降りるぞ。」

起きたばかりでまだぼんやりとしている僕にそう言うペントネルは、いつも通りのペントネルに見えた。

二人揃って下車すれば、目に飛び込んできた光景は僕達の生まれた村とどこか似たような農村だった。つい先日までいた大都市と比べるといささか寂しい気もするけれど、その分落ち着くことのできるような村だった。

「先に先生の診察所へ向かおう。宿は先生に紹介してもらった方が早そうだな。」

ケテルネから預かった診察所の住所が書かれたメモをひらひらさせながらペントネルが歩き出す。僕もそれに倣って駅を出た。

「ロン先生ってどんな人？」

「そうだな、厳しいけど優しい。いい人だよ。」

ロン先生とのエピソードを話すペントネルの表情は、昔を懐かしむような優しいものだった。ペントネルの話聞くに、ロン先生という方はきっと素晴らしい医師に違いない。話

を聞く度、そんな期待が膨らんだ。

しばらく麦畑の間を進んでいくと、煙突のついた小屋が見えてきた。あれが診察所なのだろう。扉の前に立てば、扉に OPEN と書かれた札がかかっていることに気がつく。よかった、ロン先生はいるみたいだ。扉をノックすれば、中からおっとりとした口調で入室を促された。「こんにちは。」

挨拶をしながら扉を開ければ、ロン先生と思われる人物と目が合う。初めその人はニコニコしていたけれど、僕の後ろを見て驚いた表情に変わった。

「ペントネルか？」

「お久しぶりです、先生。ケテルネの紹介で来ました。」

その言葉を聞いて彼は納得したような、一杯食わされたような顔になる。

「ケテルネめ、ペントネルが来るのならそうと言えばいいものを。僕の教えた悪戯心を今頃發揮しおって。」

掛けていたメガネを白衣の裾で拭い掛け直しながらそう笑う彼を見て、想像よりもずっとお茶目なその老医に僕は驚いた。

「ケテルネから事情は聞いているよ。よく来たの。今茶を淹れるからゆっくりしていきなまえ。君の口から、もう一度詳しいことを聞かせて欲しい。」

ゆったりと立ち上がり、奥へ入っていくロン先生にお礼を言って席に着く。間もなくしてお茶と共に戻ってきたロン先生に一部始終を話した。前に一度ケテルネに説明していたこともあり、上手く説明できたと思う。僕の話を知ると、ロン先生は腕組をして唸った。

「ふうむ、すぐに結論を出すには難しい話だな。僕も協力はしたいが、診察所もある。しばらくこの村に滞在し、うちの診察所の手伝いをしながら調べる、というのはどうかね？」その提案は僕にとつてとても有難いものだった。「宿も紹介しよう。」と付け加えてくれたロン先生にお礼とともに「よろしくお願いします。」と頭を下げれば、ロン先生はサンタクロースのような笑い方をした。早速宿に移動することになり、また明日ここに訪れる約束をして診察所を出ようとすれば、ロン先生はペントネルを呼び止めた。

「ペントネル。お前は食事を取ったら一人でもう一度ここに来なさい。」

「分かりました。」と間を開けて返事をした。ペントネルの方を見れば、バツが悪そうな悪戯がばれた子供のような、そんな顔をしていた。

「ペントネル、どこが悪いの？」

診察所から宿へ向かう途中にそう聞けば、ペントネルは笑った。

「ああ、違ふよ。きつとテストだ。先生と別れてからどのくらい成長したかを試されるんだ。」

「もしかしたら大目玉かもしれないな。」と続けるペントネルに「お医者さんって大変なんだね。」と返せば、「先生は特別だよ。」とまた笑った。

ペントネルは僕と一緒に食事を取った後宿を出て行った。ペントネルがロン先生に褒めて貰えるように祈りつつ、僕も部屋へ戻る。ペントネルが帰ってくるまでは起きているつも

りだったけれど、一度ベッドに腰かければ吸い寄せられるように寝転んでしまい、いつの間にか意識は落ちていた。

翌朝、久しぶりに小鳥の歌声で目を覚ました僕が身体を起こすと、何かを書いているペントネルが目に入ってきた。

「おはよう、ペントネル。何してるの？」

「ああ、おはよう。ケテルネに札を兼ねて手紙を書いているんだ。」

「それはいいね。僕も村のみんなへ手紙が書きたい。」

「ならこの便箋を使うといい。まだまだ余りはあるから。」

「ありがとう。ペントネルはなんて書いてのか聞いても？」

「それは秘密だな。なんたって、先生の悪口だから。」

冗談めかして答えるペントネルに、僕も思わず笑ってしまう。この村に来てから、ペントネルはよく笑っているような気がする。元からよく笑うから僕の気のせいかもしれないけれど。

ペントネルが書きかけの便箋を封筒にしようと、僕達は朝食を取りに食堂へ向かった。今日からしばらくロン先生の手伝いをしながら情報を集めることになっている。診察所の手伝いとは何をすればいいのだろう。何だかわくわくするような、緊張するような気持ちで診察所へ向かう僕を、ペントネルは「子供みたいだ。」とまた笑った。

基本的に僕は診察所の掃除や村の子どもの達の相手、薬を村の人達の家へ運ぶ手伝いを、ペントネルは診察の手伝いをして過ごした。のんびり屋なロン先生に影響されて思ったよりも長くこの村に留まっているけれど、それでも着実にことは前に進んでいた。村への手紙も、いい報告ができそうだと文中に記すことが出来たので読んでもらうのが楽しみだ。随分長い手紙になってしまったけれど、それは仕方ないことだと思う。ペントネルもケテルネへの手紙を書き終えたようで、翌朝一番の便で出すという約束と共に僕の手紙も預かってくれた。

とても穏やかで、心安らぐ時間をこの村では過ごすことができた。どこか懐かしく、僕達に取って日常だったものに似た日々に僕は安心していた。その夜までは僕もペントネルも日常を過ごしていると、確かにそう思っていた。けれど、それは僕一人の話だったらしい。

朝目が覚めると、ペントネルは部屋にいなかった。部屋に備え付けのミニテーブルの上に通の見慣れた封筒が置かれているだけだ。宛名のないそれに誰へのものだろうと疑問を抱きつつ、手紙を出しに行っただけであろうペントネルを待っていたけれど、いくら待っても帰ってくる気配がない。もしかしたらこれは書き置きなのではないか。そう考えて便箋を取り出して読んだ僕は、姉がこの世を去ってから初めて涙を流した。姉の分と、ペントネルの分涙を流した。どうやら僕は、取り返しのつかない罪を起こしてしまったようだ。後悔してもしきることができない。

僕は、ここで僕のことを語るのをやめようと思う。願わくば、僕のこの話は一人の人間の

愚かな末路として頭の隅に置いておいて欲しい。

親愛なる友人へ

君には謝らなければならぬことが山ほどある。まずは、黙っていなくなってしまうことを謝罪したい。この手紙を君が読む頃には、私は恐らく村を出ているだろうから、どうか私のことは探さないで欲しい。本当は診察所で先生の口から説明してもらおうとも思っていたけれど、それではあまりにも君に申し訳が立たないのでこの場を借りて全てを話そうと思う。

第一に私が君の前から姿を消した理由だが、簡潔に言えば私はもう長くないからだ。もつて三日というところだろう。君は中毒症状の存在を知っていると思う。そう、中央都市の病院の待合室で眺めていたポスターに書かれていたあれだ。大抵のものには致死量と言うものが存在する。どんなものでも過剰摂取してしまえば身体がもたなくなるとのことだ。それは目に見えるものに限った話ではない。何故今そのような話をしているかというと、私は中毒症を引き起こしているからだ。君は優しさ欠乏症に関して興味を持っていたが、私の症状はそれと似たもので、あるいは対局にある優しさ中毒になる。言葉の通り、優しさの過剰摂取により身体ではなく精神が破損してしまいう中毒症だ。身体への異変は大きくはないため、今でもこうして筆を執ることができることが、今の私にとっては救いである。

第二に、君の姉についてである。ここから、私は私のわがままで君に残酷な現実を突きつけようとしている。君を傷つけることは明白だけれど、君にこれを伝えたいという選択は私にとつて非常に耐え難いものだ。君を傷つけることを分かった上で記すことを、どうか許して欲しい。君の姉の死因は恐らく私と同じだと推測する。これはケテルネと先生も同じ結論を出したので、間違いはないと断言してもいいだろう。また、ケテルネと先生は私が口止めた結果黙っていただけなので、二人に罪はないことは理解して欲しい。

第三に、全て分かっていた上で黙っていたことを謝罪したい。いや、さらに言えば私は君が真実に辿り着くのを防ぐために村長に頼み込み、君の旅に同行したということを中心に白状する。ずっと君を騙していたことを心から申し訳なく思う。ひとつ弁明の余地が残っているとすれば、私は姉の死因を知った君が自分を責めるのを防ぎたかった。姉に口癖のように優しい子だと言われていた君が、その優しさを悔いることがあってはならない。彼女は確かに、君の優しさに救われていた。そう考えた私は全てを秘匿してしまおうと考えた。しかし、自分の死を目前にしてこの秘密を墓場まで持っていくことをやめてしまった今、私はその選択を心底後悔している。旅に出てまで真実を追い求めようとした君を欺き続けたことを、ここに重ねて謝罪したい。

最後に、どうか自分を責めないで欲しい。先述の通り、君の姉も、そして私も君のその優しさに幾度となく救われてきた。君の優しさは大変な美德であり、決して恥ずべき部分でも悔いるべき部分でもない。誇つていいことだ。君の姉は生まれつきそういう体質だったにすぎないし、私に関してはこの一件でそうなってしまうたので、きっと天罰だろうと考えてい

る。汽車の中でした質問に君があのような回答をした時には、私の運命はきつともう決まっていた。この手紙は、優しさという依存性のあるものを我慢出来なかった、耐え症のない私に対する最後の甘えだ。この先君が旅を続けるのかは分からないけれど、許されるのなら君の幸福を祈る。

追伸

君から預かった手紙はきちんと村へ出した。後のことはケテルネに任せてあるので、もし村に帰るのであれば頼るといい。

ペントネル